

「縮小・成熟」時代の魅せる街づくり

「縮小・成熟」時代の住宅・インフラづくり

日本の二〇一九年の出生数は八六万人、死亡数は一三七万人、年間に約五十一万人の人口自然減が起きている。日本社会は急速な少子高齢化という構造変化の中で、戦後の人口増加を背景とする高度経済成長期の「拡大・成長」から、安定した「縮小・成熟」の時代を迎えている。

世界で最も高齢化が進むわが国は、課題先進国とも言われる。どのような社会経済政策を考える上で、人口動態は重要な要素だ。少子高齢化や人口減少時代の街づくりに向けた都市戦略を考えるためには、人口や世帯の構造変化を的確に捉えることが必要だ。

日本ではすでに人口減少が進む一方、平均世帯人員が減っているため、世帯数は増え続けている。それにもかかわらず空き家が増えているのは、世帯規模の縮小による新たな住宅需要と既存の住宅ストックとの間にミスマッチが生じている

ひとり暮らしや夫婦のみ世帯が過半数を超える現在、多くの小規模世帯向けの住宅が必要だ。子どもが増える時代には住宅の「増築」需要が大きかったが、家族が縮小する時代には「減築」が求められる。

一九六〇年代以降、大都市近郊で開発された大規模ニュータウンでも、高齢化とともに空き家が目立っている。今後は人口だけでなく世帯数自体も減少するため、世帯の小規模化による「減築」とともに、集合住宅の戸数を減らす「減築」も増えるだろう。

東京オリンピック・パラリンピックに向けて、東京をはじめ全国各地のインフラの整備が進んでいる。高度経済成長期だった一九六四年の東京大会の時は、日本中が東海道新幹線の開業や首都高速道路の開通に沸いた。

経済成長最優先から成熟した生活大国を目指す今日、都市インフラのあり方も大きく変わっている。高速道路などの交通インフラ整備

公益社団法人 日本フィランソロピー協会
シニアフェロー

土堤内 昭雄



Akio Doteuchi

も新たなパラダイム転換を図ることが必要だ。

アメリカのボストン市では市街地を分断していた高速道路を地下に埋設、上部を公園や商業施設として活用する再開発を行った。韓国ソウル市では清溪川を覆う高架道路を撤去し、都心の水辺景観を修復することで都市の賑わいを取り戻した。

ソウル市の清溪川には撤去された高架道路のコンクリート製橋脚三本が遺構として残されている。国の重要文化財である日本橋の上部を覆っている首都高の橋脚が、日本の高度経済成長期を象徴する産業遺産になる日もそう遠くないかもしれない。

歩車「分離」から「共存へ」、共生する都市

高度経済成長期はモータリゼーションが進展した時代でもあった。急増する自動車交通対策として歩車分離が図られ、多くの横断歩道

橋がつくられた。近年では施設の老朽化が進み、維持管理のための財政負担も大きい。少子高齢化の進展で子どもや高齢者の利用が減り、施設の撤去も進んでいる。

各地方自治体は、歩道橋の撤去後に信号機付きの横断歩道を設けるなど、子どもや高齢者などの歩行者優先の街づくりを行っている。幅員の広い道路では、高齢者や小さな子どもが安全に安心して渡れる昇降機付き横断歩道橋の設置なども求められる。

また、高齢化により移動困難者が増えることが予想され、自動運転技術を生かした新たな交通・物流体系の構築が必要だ。鉄道やバスなどの人を効率的に大量移送できる公共交通機関に加え、買い物や通院など地域の日常生活を支えるパーソナルな移動手段の充実が不可欠で、ますます歩車共存の街づくりが重要になるだろう。

世界から東京オリンピック・パラリンピックで訪れるアスリートや観客の中には、車いすを利用する人も

多く含まれる。国、東京都、オリンピック・パラリンピック組織委員会では、東京など日本各地のバリアフリー化を積極的に推進している。「東京2020」大会のレガシーは、共生社会と一億総活躍社会の実現が目標だ。高齢先進国・日本で開催される大会が、世界に対して新たな共生社会のモデルを提示できるだろうか。

誰もが容易に空間移動できるアクセシビリティの向上は、東京オリンピック・パラリンピックの重要な「おもてなし」のひとつだ。ハード・ソフト両面のバリアフリー化が一体となり、障害者権利条約の理念を踏まえた共生都市の実現に近づく。

魅せる街つくる都市戦略

かつて大都市で活躍した路面電車は、自動車交通に取って替われ、多くの都市で廃止されてきたが、近年では復活の動きが見られる。コンパクトシティを標榜する富山市では、中心市街地の活性化や

地球環境負荷の低減に資する、人と共存できる新たな公共交通機関として路面電車が再認識され、路線の拡張が続いている。五〇年前の東京・銀座にも都電が走っていた。今、銀座通りに再び路面電車を復活させてはどうか。テemaparkのアトラクションライドのような路面電車からは、街の風景をゆつくり楽しむことができる。

東京が世界的な観光都市になるためには、多くの人が楽しく集える場所が必要だ。歩道や車両制限した広場にカフェを設置したり、橋の上に飲食店を設けたりする都市計画関連法規の見直しや規制緩和も必要だろう。

交通インフラも経済効率性だけでなく、都市の賑わいを演出するひとつの装置だ。道路、橋、広場、駅舎、路面電車などの都市インフラ自体が大勢の人を惹きつけ、多くの人の記憶に残る都市景観になる。今後の都市インフラデザインを、「魅せる街づくり」のための都市戦略にすることを提案したい。